

2017年度しあわせ研究

## 奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究

—正面銘文として刻された書—

研究員 廣瀬 裕之  
漆原 徹  
遠藤 祐介



薬師寺・本坊寺務所前にて▲

私たちは、「中国仏教の日本への受容」をテーマとして「しあわせ研究」の調査を続行する中で、初期仏教を象徴するものといえる奈良時代の日本最古の「佛足石」に刻された銘文の書美とその背景について注目し、書道学・歴史学・仏教学から考察を加えました。この銘文は、中国北魏の楷書の書風を基調としながら古隸の雰囲気をも持ち、摩崖碑独特の妙趣を多分に秘めています。しかし時を経て摩滅が著しく筆画が判明しにくくなっています。今回明らかにできたことは石周囲の銘文のうち、正面の銘文刻を、昭和40年代に採拓された拓本をもとに、傷と書線の判別をし、文字の骨格を読み取るだけでなく、書の古典としても有用なものとするため、刻された当時の「書」の姿はどのようなものであったか書としての線の再現を試みることを目標として取り組んだことです。字間と行間などの関係性、線の太細などなるべく精密な再現を試みました。先行研究を整理して未だ不

明確だった文字や解釈について可能な限り検討と考察を加え欠損した箇所再現にも当たり、その意味と解釈を明確にすることができました。

本成果は、研究論文として『武蔵野教育学論集』第4号(2018年3月1日・武蔵野大学教育学研究所発行)に掲載。同月7日、完成したばかりの論文集を携えて感謝と報告を兼ね、3人で奈良・薬師寺へ。紅梅白梅が美しく咲く同寺本坊の応接室でこの研究成果を喜んでくださり、次なる研究の協力を許可してくださいました。

▼復元した正面銘文(部分)

